

島のまちづくり

## 1. 調査の課題

### ①調査の目的

島前合宿の目的は、「島の教育とまちづくりを学ぶ」。それに加え、私個人の目的は、まちづくりの成功例として取り上げられている島前に生活している中高生、地域の方々に、島前についてどのように考えているか、生の意見を聞く。

## 2. 調査の概要

### ①調査対象

島根県隠岐郡島前高校のヒトツナギ部の高校生、西ノ島中学校の3年生、地域の方々

### ②日時・場所等

2015年8月22日(土)～27(木)

### ③調査方法

隠岐島前高校ヒトツナギ部との交流

西ノ島中学校に出前授業

隠岐学習センターでインターン中の大学生とワークショップ

## 3. 調査の内容

### ②個々の調査結果報告

#### ● 隠岐島前高校ヒトツナギ部との交流

高校生3人、法政大学の大学生3人の計6人グループで今年の8月に行われたヒトツナギの振り返りとフィードバックを行った。今回の交流を通して、ヒトツナギ部の目的は「振り返りとフィードバックを行い、来年のヒトツナギに還元する」、「1年生の『ヒトツナギ部員としての役割と責任』の自覚を促す」、大学生の目的は「地域の人と積極的にコミュニケーションを図れる人間になる」だった。

まず始めに行われたアイスブレイクでは、対面する高校生とペアになり、共通項探しをした。今回の交流会はグループがメインだったので、アイスブレイクは個人ではなく、グループで行ってもよかったと思うが、アイスブレイクを通して全体的に緊張感が解けて良い雰囲気を作り出すことが出来た。

近藤さんが交流会の流れの説明と、趣旨説明をおおまかにした後、グループごと大学生、高校生のみの振り返りを開始した。

まず、このときに、大学生側が「ヒトツナギどうだった？」と大雑把な質問をしてしまったので、高校生が思いついた反省をぼつたらぼつたらあげる形になってしまった。

そうではなくて、ヒトツナギの活動を時系列で反省すればよかったなと思った。

次に、地域の方への質問をグループごとに考える作業に移った。他のグルー

プがどうだったのかわからないが、私たちのグループではなかなか質問が思いつかず、さっきの振り返りの延長のような時間になってしまい、質問を考えるのに苦労した。

地域の方を交えての振り返りでは先に出た質問項目を高校生が地域の方に質問する形式をとった。この際に、全体的にあまり大学生が深くコミットできず、ただ聴いているだけになってしまった。また、質問数が少なく、あてがわれた時間よりも早く終わってしまい、地域の方に気をつかわせてしまった。ただ、私のグループにいらっしゃった地域の方、佐倉さんは、地域の方の中でも熱心に島前高校ヒトツナギ部のことを応援して下さっている方で、高校生と私たち大学生からは決して出なかった、地域の方の意見を沢山教えて下さった。今回、お話を聞くことが出来て本当にプラスになったと思う。内輪だけであれこれ考えているだけではわからないこと、見えないことが沢山あるはずだから、なかなか難しいとは思いますが、今回のように地域と交流する機会がこの先もあるといいと思った。

地域の方々の意見も踏まえ、もう一度あらためて、お高校生と大学生で今年のヒトツナギについて振り返ったときは、自分たちではよかれと思ってやっていた事が地域の方々にとっては快く思われていなかったり、またその逆も然り、といったように、新たな視点からの意見を吸収できた上での反省をすることが出来た。

最後に、改善案・継続案をそれぞれ3つずつ出しあい、今後につなげていこうというまとめで終わった。

この交流会を催すにあたって、大学生側、高校生側、どちらも事前準備が足りていなかったように思える。大学生側に至っては全くヒトツナギ部の事を知らないままこの交流会に参加した人もいたので、事前学習で時間はとらなかったものの、各自である程度のヒトツナギ部について学習した上で臨むべきだった。また、高校生側は、今回の反省が「グループ」で行われるのだから、その前段階として「個人」でもう少し反省した上で、臨めたら良かったと思う。

交流会が行われた後、大学生内での反省会をした。全体的には、うまくいったように思えたという風に自分たちでは解釈したが、島前高校の先生からの反省と改善、湯浅先生からのフィードバックをいただいて、大学生が思って

いたよりも評価が厳しく、それらの反省を考慮すると目的を達成出来なかったように思う。

今回の交流会を通して、一番驚いたことはヒトツナギ部の部員のほとんどが島外の子たちだということだ。今年で 5 回目のヒトツナギになるが、あまりヒトツナギのことを知らない島の人や、「ヒトツナギ」と聞いて手のひらを返す島の人はまだまだいるそうだ。「よそ者がなんかやっているぞ」というように。

「人とのつながり」を大事にしているからこそ、もっともっと地域の人たちと関係を築くような活動が増やして、時間はかかっても島の人たちをも魅了するような活動になることを心から願うばかりだ。

自分自身、高校生の頃、都内で強豪の吹奏楽部に所属していたのだが、そこで自分たちが一生懸命頑張っている姿を見るだけで応援してくれる人がいる、周りの人たちが手を差し伸べてくれる、そんな経験をした。熱意があればそれに賛同してくれる人がいる、その素晴らしさを知っているからこそ、ヒトツナギの子たちにはもっと積極的に活動で熱意を示して、島内の中学生だけでなく、地域の方々みんなも魅了するようになってほしいと思った。

今回、ヒトツナギの振り返りを一緒にして、この反省が来年どのように生かされるのか、できることであれば来年のヒトツナギに実際に参加したいと思う。

- 西ノ島中学校での出前授業

西ノ島中学校での出前授業での大学生は、

- ①中学生が本音ではなしたくなるように仲良くなる
- ②ただ楽しむのではなく真面目に
- ③出来るだけ自分の意見は控えて聴きだす
- ④時間を気にしながら進行をスムーズに

以上のことを注意しながら、中学生が自分を知ることで自己肯定感を育み、学習意欲・進学意欲の向上を目指すという目標を掲げて臨んだ。

体育館に中学生と大学生が対面する形で出前授業は始まった。高校生との交流会とは比べ物にならないくらい緊張感と堅い雰囲気があった。

高校生との交流会と同様、まずアイスブレイクからのスタート。この時のアイスブレイクは「今感じていること、思っていることを素直に述べる」、というもので、挙手制で行われた。大学生が率先的に手をあげ、いろいろと発言するが、なかなか中学生側から手があがらず、沈黙になってしまう時間もあ

り、予想はしていたが、高校生のときのように上手くいかなかった。  
その後、ペアをつくり、ペアごと距離を置くためにそれぞれ散らばって話始めた。ペアになった男の子は、年の割に落ち着いていて、とても話が進んだ。中学生がライフストーリーを作成する際にはこの時はこうだった、というような説明をしながら一筆書きでかけていたのには驚いた。本人も言っていたことだが、自分や周りのことを見る能力、客観視する能力に長けているようだった。中学生のライフストーリー作成、発表は順調に進んだが、一番難しかったのはジョハリの窓をもとに行う自己分析だった。特に、未知の自分を考える際には沈黙が続き、結局頭をひねっても 1 つしかでなかったのが心残りだった。

島前高校のヒトツナギ部の子が島外出身だったのに対して、西ノ島中学校の子は島生まれ島育ちの、生粋の島の子だった。本当の当事者である中学生にとってはあまり島のまちづくりには興味はなさそうで、島についても「なんもないよ」と言っていたのが印象的だった。

- 学習センターのインターン中の大学生とワークショップ

予定では海士町にある学習センターに直接行き、学習センターでインターン中の大学生と地域についてのワークショップを行う予定だったが、台風接近により、船が欠航してしまったので、**Skype** で行われた。

自然には逆らえないことは重々承知しているが、直接交流ではなかったのも、やはり、「話し合い」を共有出来なかったのが残念だった。お互いにそれぞれ話し合ったことを共有して、そこから話が広がることなくメモしあうだけ、というような感じになってしまった。ワークショップを行うには環境は悪かったが、それにしてもインターン生よりも、法大生の活気がないように感じられ、あまり深い話し合いが出来なかったと思った。また、何か質問を出した方がいいのは明らかな状況においても法大生から質問が積極的にならなかったのはよくなかった。

学習センターのインターン生やインターン中の近藤さんの話を聞いて、「若者」「よそ者」が地域に入ることの難しさを痛感するとともに、地域・まちづくりを勉強する大学生として考えの甘さを実感した。また、実際に地域に入っている方々の意見が聞けるいい機会だったと思う。

- 企画以外での感想

随所で人のあたたかさを感じる毎日だった。

キンニャモニャ祭りでは年に 1 度の祭りということもあって、たくさんの島

の人たちが集い、老若男女問わず、全員でキンニャモニャ踊りを踊れてとても楽しかった。都内ではみんなで踊るような祭りはそうそうないし、誰もが踊れる踊りというものがないので、知らない人でも同じキンニャモニャを踊りながら笑いあうなんて、とても温かい祭りに参加できたんだなとしみじみ感じた。

キンニャモニャ祭りのあと、海士町から西ノ島に帰る為に船を待っていたのだが、あまりの人の多さに、船がなかなか来なかったときには近藤さんのお知り合いの方の漁船で乗っけていってもらった。

知らない人でもすれ違えば「こんにちは」。ご近所さんでも挨拶するのをどこか恥ずかしく思っていた自分を恥じると同時に、島では自然と笑顔であいさつ出来ることに驚いた。

- 全体を通しての感想

予定では4泊5日だったが、フェリーが欠航になってしまったので5泊6日の旅となったが、本当にあつという間の時間だった。

今回集まったメンバーは島前合宿を目的に学年関係なく集まったので、当然初対面の人が多かった。合宿前には、初対面の人たちと寝泊まりして楽しいか不安に思っていたが、そんな不安はすぐに消え去り、5泊6日間、本当に充実していた日々だった。日中の活動ではグループを作ることが多かったので、いろんなメンバーと意見を出し合ったり、討論したり、関わりあうことができた。夜には、それぞれのジョハリも窓であーだこーだみんなで真面目に話し合ったりした。

夏休みをただだらだらと過ごしたくない、何かに参加しようと思って参加した島前合宿だったが、本当に参加してよかったと思う。まちづくりに関してただ大学の教室で授業を受けてはわからなかった、島の人たちの思いや願いを目の当たりにして、ますますまちづくりに興味が湧ききっかけとなった。

この5泊6日の経験をこれからのまなびに生かせるかどうか的大事だと思うので、しっかりとこれからの学びに生かしていきたい。